

翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(二)

高山, 倫明

<https://doi.org/10.15017/2559322>

出版情報 : 文學研究. 96, pp.1-14, 1999-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(二)

高山倫明

『文学研究』九五輯の前稿につづき、清代の日本研究書『吾妻鏡補』(翁広平著、嘉慶十九・一八一四年序)の「国語解」に引用された「海外奇談」の読解を試みる。今回は「地理類」と「身体類」である。くりかえしになるが、以下に凡例を示しておく。

(1) 静嘉堂文庫所蔵『吾妻鏡補』(三十巻本)を底本とする。

(2) 先行の2種の校本を、以下のように略称する。

校本A 〓 渡辺三男「吾妻鏡補所引の日本語彙——校本「海外奇談国語解」——」

校本B 〓 大友信一・木村晟『吾妻鏡補所載 海外奇談国語解 本文と索引』

(3) 右記の他、以下の略語を用いることがある。

底本 〓 静嘉堂本

上海本 または 上 〓 上海図書館本

駒沢本 または 駒 〓 駒沢大学図書館蔵本

駒一本 〓 駒沢大学図書館蔵本欄外に注記された、他本(未詳)との異同注記

覚え書き 〓 校本Bの「本文校定上の覚え書き」

郷土誌方言集 〓 『長崎県郷土誌』付録「方言集」

翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(二)

(4) 通し番号、「」に入れた見出し語、音注、()に入れた平仮名の試読、の順で各項目を掲出し、先行研究における読みをA… B…の形でつづけてしめす。Aは校本A、Bは校本Bのこと。Bにおいて仮名に傍線が施されているのは「読みに少々無理があると思われるところ」、平仮名で書かれたのは「補ったところ」である(いずれも校本Bの凡例から)。通し番号は同書にしたがった。

(5) 校本Aの読みについては、原本のままに拗音や促音を小書にしない。校本Bはルビで示されるためやはり拗音や促音が判別できないが、索引や「覚え書き」に照して判断した。

(6) 異同があれば《》に入れてそれを示す。《駒上・甲・乙》は、駒沢大学図書館本と上海図書館本において、底本の「甲」字が「乙」字になっている意。本文の改訂を要する場合は、【甲↓乙】で底本の「甲」字を「乙」に改訂することを示す。

(7) 解読できないものについては(■)とする。校本A・Bで未読のものは●印で示す。

五、試解(承前)

地理類

0600 「地」 治(じ) A…チ B…チ
雪搭(した?) じた? A…セタ、下? B…シタ

校本B覚え書きには

音注「治・雪搭」(簡要17「雪搭」)は「チ・シタ」。音注漢字「雪」は、522白 雪白へ六(シロ)があり、簡要95にも「雪多力」(「ヒトリ」)がある。簡要「書き込み」は「之 chi・自口 Tsuchi」(チ・ツチ)と補入し、さ

らに上欄外に「雪搭 下也・自己 土也」と注記す。

とある。「治」字は0233「令尊 屋也治山馬」(おやしさま)、0473「味 垂治外」(あじわい)などからすれば「ち」よりは「じ」か。「雪」字には0510「絲 雪立一多」(う?)の例もあるが、0522「白 雪白」(?)とともになお未詳。音注「雪搭」は『唐語簡要』欄外注記の解があたっていたいそうだが、「じだ」の可能性もある。『長崎県方言辞典』「じだ 地面」。

0100「山」雅馬(やま) A…ヤマ B…ヤマ

0101「鳥」失馬(しま) A…シマ B…シマ

0102「石」衣式(いし) A…イシ B…イシ

0103「川」措空(かわ) A…カワ B…カワ

音注「空」字は、他には0157「肝 哈拉空搭(はらわた)、0448「小菜」阿空(あわ)、0688「出貨」宜空搭施(にわたり)、0971「圈」空(わ)などがあり、いずれもワを写している。

0104「河」措画(【措↓措】かわ) A…カワ B…【措↓措】カワ 《駒上…措ナシ》

音注「措」字は改訂の要があり、音注「画」字も他には0779「説話」画那酥(はなす)の1例のみ。後者は匪母の字で、近世唐音資料では「ハア」「ワア」といった形で写されている。「かわ」であることは間違いないが、いまひとつすっきりしない。

0105「水」迷土(みず) A…ミズ B…ミツ

0106「冰」挨来里(あられ) A…アラレ B…アラレ

0107「潮満(潮満)」失活捺迷搭(しおのみた) A…【一(駒) ↓之?】シオノミチタ B…シオノミタ 《駒上…迷搭》
迷一搭

校本B覚え書きに

駒本、音注「失活捺迷搭」を「失活捺迷一搭」と「一」を補入せり。校本は「一」を「之」と校して「シオノミチタ」と解説さる。

とある。ここは校本Bの読みに従うが、「ミッタ」という口語形を写した可能性もある。『長崎県方言辞典』「みった(句) 満ちた。「潮のミッタ時」東彼岸—川棚・東彼岸。」

0108 「潮退」失活捺非搭(しおのひた) A…シオノヒタ B…シオノヒタ

0109 「田」塔(た) A…タ B…タ

0110 「町」馬之(まち) A…マチ B…マチ

0111 「街」抜抜(ばば) A…ババ、馬場 B…ババ

古くからしばしば取り上げられてきた、長崎の代表的な俚言のひとつである。『壺蘆園雜記』「往還をばば」、『筑紫紀行』「町中の道をばば」、『長崎方言集覽』「ババ 馬場。街上を云ふ」、『長崎県方言辞典』「ばば 道路。往来。長崎市」。

0112 「路」寛止(みち) A…ミチ B…ミチ

0113 「橋」豁失(はし) A…ハシ B…ハシ

0114 「屋」希雅(へや) A…ヘヤ B…ヘヤ

後の「房屋類」には、0536「房屋」希雅(へや)の項で同じ音注がある。

0115 「長崎」南加沙几(ながさき) A…ナガサキ B…ナガサキ

身體類

0116 「人」倪(■) A…● B…●

校本B覚え書きに

音注「倪」は不明。現代北京音はⁱであるから「位」に関係あるか。213に「播介倪」、214に「阿轟倪」とあり。とある。右に指摘されたように、音訳漢字「倪」の例はここと0213「善人」播介倪(よか■?)、0214「悪人」阿轟「倪?」(あくにん?)のみ。「あくにん」はよいとしても「よかにん」や単独での「にん」は不審。仁(ジン)・ニセ(ニ才)・ニシ(『長崎県方言辞典』)にし 君。お前。ニ等も考えられるが、3例を同時に説明できるものはない。『大漢和辞典』「倪」字の項に「[現] 呉の地方の俗語では、自己を称して倪といふ。自称。」とあるように、この字は少々の無理を敢えてし、表語性をもねらった可能性がある。

0117 「頭」阿達毛（あたま） A…アタマ B…アタマ

0118 「頼剃頭」蟹其（はげ） A…ガキ B…ハゲ？

校本B覚え書きに

校本、音注「蟹其」を「ガキ」。本書は「ハゲ」と試読する。

とある。見出し語は一般の辞書類に見えないが、『漢語方言詞匯』によれば蘇州方言で禿頭のことをさす語。なお、「頼頭」は白髪などで髪を脱落した頭、しらくも頭の意。音注「蟹」字（蟹韻匣母）は他に用例がないが、『漢語方言字匯』によれば南方諸方言に「[ai]」「[æ]」等が見られる。ここは校本Bの「ハゲ」が妥当であろう。

0119 「剃頭」措密蘇羅（かみそる） A…カミソル B…カミソル

0120 「髪」措面（かみ） A…カミ B…カミ

0121 「面」面（めめ） A…メメ B…メメ

『長崎県方言辞典』「めめ 見目。見掛け。外見。「メメがいい」老岐。メメンヨカ 器量がよい。五島。」「浜荻」
「めめ 器量」。

0122 「麻臉」面面破羅（■） A…メメハル B…メメハル

見出し語はあばたづらの意。『雅俗漢語訳解』に「麻臉 みつちや」、「南山俗語考」付録に「麻臉 ^{マアレン}イモカホ」などとある。音注「面面」は前項の「めめ」でよからうが、「破羅」が不明。「破」字は他に例がなく、「羅」字は0043「春花羅（はる）、0305「鶴」子羅（つる）、0236「小工断」晒婆羅同（さぶろどん）、0860「相好」年科羅（ねんごろ）等々のように／＼もしくは／＼にあたるのが普通。「めめぼろ」のような語が想像されるが、確認ができない。

0123 「會面（会面）」面貌乎（みまう？） A…● B…メンボク 《駒上…乎…子》

校本B覚え書きに

駒本、音注「面貌乎」の「乎」を「子」に誤写。また、見出し語「會面」に現代北京語で *hui mian*、^{フイメン}「面会スル」の意。本書は「メンボク」と訓ずる。

とある。見出し語は出会う・面会するの意で、『雅俗漢語訳解』には「會面 逢ひみる」とある。身體類には場違いな見出し語であるが、音注は「ミマウ」と読めそうである（「メンボク」はちよつと無理）。音注「面貌乎」の「面貌」はもちろん顔の意であり、こういったところから身體類にまぎれたものか。なお不審。

0124 「眉毛」眉其(めえげ) A…メエゲ B…メエゲ

音注「眉」字は他に例がない。0088「明日」妙日子(みょうにち)の「日子」、0436「米」可米(こめ)の「米」などとともに、意味の通じる字を意図的に含ませたものであろう。『長崎方言集覧』「マイゲ 眉毛。メーゲとも云ふ。」「『長崎方言集』「マイゲ 眉毛」「メーゲ 眉毛」、『長崎県方言辞典』「まいげ まゆげ。眉。〈言地〉(二二)によれば、長崎県内は九州の北半部とともにマイゲが多い。五島―宇久。北松浦―吉井。大村市旧市内。長崎市。」「同「めえげ ①まゆげ。眉毛。対馬―厳原町豆酸。佐世保市宮村。東彼杵―東彼杵町千綿。大村市鈴田。長崎市。西彼杵―伊王島。島原市旧市内・三会。南高来―吾妻町山田・瑞穂・国見・有明・千々石・布津・北串山・南有馬。」「

0125 「眼睛」米(め) A…メ B…メ

0126 「耳」米米(みみ) A…ミミ B…ミミ

0127 「聾子」存朋(つんぼ・つんぼう) A…ツンボ B…ツンボ

0128 「瞎」密瞽辣(めくら) A…ミクラ B…メクラ

音注「瞽」字は他に例がない。音訳漢字の孤例の中には、0214「悪人」阿疊「倪？」(あくにん)の「疊」、0263「皇帝」欽立山馬(きんりさま)の「欽」、1036「碎」鳥之壞六(うちわる)の「壞」などのように、表語のためにあえて選ばれたかと思われるものが少なくない。

0129 「鼻」哈乃(はな) A…ハナ B…ハナ

0130 「口」可子(くち) A…クツ B…クチ

0131 「牙」豁施(■) A…ハシ? B…ハシ?

見出し語は歯の意。音注を素直に読めば「はし」であるが、そういった方言語形の確証がない。「は(歯)」と「し(歯)」の二語に分けるのもちょっと苦しう。

0132 「舌」色當(した) A…シタ B…シタ

0133 「喉」奴獨(のど) A…ノド B…ノド

0134 「鬢」助其(ひげ) A…ヒゲ B…ヒゲ

音注「助」字は文韻曉母で「勳」「勲」の異体字。他に例がないが、近世唐音資料には「ヒユン」のような語形が見えており、「ひげ」でよからう。

0135 「頸」可皮(くび) A…クビ B…クビ

0136 「身」五底(ごてー) A…ゴテ B…ゴテイ

『筑紫紀行』「体を 五躰」、『長崎方言集覧』「ゴタイ 五躰、からだ」、『長崎県方言辞典』「ごてえ 五体。身体。老岐―勝本。(へ全方)①身体。長崎・宮崎。②足。長崎・鹿児島。」↓ごてゃあ「ごてゃあ 五体。からだ。また、体の部分。五島―三井衆(四肢・腕と脚)。北松浦―福島(背中)。佐世保市早岐。西彼杵―野母崎。」

0137 「身體」哦太(ごたい) A…ゴタイ B…ゴタイ

0138 「洗浴」由滑皮(ゆあび) A…ユワビ B…ユワビ 《駒上…浴ナシ》

後の「人事類」に0813「洗浴」由滑皮(ゆあび)として重出している。

0139 「臂」呉磔(うで) A…ウデ、腕 B…ウデ

音注「磔」字は帖韻定母で磔と同音。他には0632「鐺」黄磔揩尼(うでがね)の例があるのみ。

0140 「手」帖(て) A…テ B…テ

0141 「搓手」帖司六(てする) A…テスル、手擦る B…テスル 《駒上…手<子》

見出し語は手をこする、手をもむ、の意。

0142 「拍手」帖烏篤(てうとう) A…テウト B…テウツ

音注「篤」字、他には0338「金線魚」一篤郁李(いとより)、0746「怕」烏篤落思(おとろし)の2例。破擦音の

ツには開きがある。

0143 「招手」麥業古(まねく) A…マネク B…マネク

0144 「指」衣皮(いび) A…イビ B…イビ

『長崎方言集』「イビ 指」、『長崎県方言辞典』「いび 指。五島―小値賀。長崎市。西彼杵―野母崎。南高来―有明町三会・国見町土黒・吾妻町山田・布津・有家・加津佐。イービ 南高来―深江。」

0145 「爪」子米(つめ) A…ツメ B…ツメ

0146 「背」式那甲(せなか) A…セナカ B…セナカ

0147 「擦」式那甲司六(せなかする) A…セナカスル B…セナカスル

0148 「心」可可落(こころ) A…ココロ B…ココロ

0149 「用心」又神(ようじん) A…ヨウジン B…ヨウジン

0150 「費心」屋式娃(おせわ) A…オセワ、お世話 B…オセワ

見出し語は心をつかう、心を煩わすの意。『唐話纂要』卷一「費心心ヲツカフ」、『南山考講記』「費心セワラスル」。

0151 「小心」 哭哭奴福司 該(こころほすか?) A…ココノホスカ、心の細か B…ココロノホスカ 《駒上…哭哭可》

見出し語は用心する、慎み深くするの意。『南山考講記』二に「小心好ヨウジンシタガヨイ」、『唐話纂要』卷一に「慇懃ヘリクタル 小心同上」などとある。ただ、『筑紫方言』に「大きな ふとい」「小き こまい又こまか又ほそいとも ふとい こまい ほそい のいもじも言によりてはかもじにかへて ふとかもの こまかもの ほそかものなど云」、『葦蘆圃雜記』に「小さいことを ほそかた又細ひ又こまい」「大きいことを ふとかた又ふとひ」、『長崎県方言辞典』に「ほすか 小さい。また、細い。」「ふとか 大きい」などとあるように、長崎には小さい／大きいの対立を表すホソ／フトの対があり、人物類の項で度量の大きなさまをいう0235「大量」哭哭奴福的(こころふて?)と対になるとすれば、ここは度量の小さいさまをいう語ということになろう。両項で共通する「哭哭奴」の解釈が問題で、校本A Bは「こころの」の訛形を写したものと解するようであるが、やや落ち着きが悪い。0588「椀」以措宜(いかり)、1047「有餘」阿馬宜(あまり)のようにラ行を疑母の字で写したかと疑われる例もあるので、ここの泥母の「奴」字を／＼に引き当てるのも一案ではあるが、「こころほそか」「こころふとか(ふて)」といった語形の確証があるわけでもない。ちなみに「こころ」には他に0148「心」可落(こころ)、0739「快活」哭哭六郁衣(こころよい)、0859「記念」哭哭六宜措措耳(こころにかかる)の例がある。手で腹を叩いて「ここの」と答えたのをそのまま写した可能性なども考えないでもないが、穿ちすぎか。

0152 「無心人」 夫几里捺 A…フギリナヒト、不義理な人 B…フギリナヒト

「無心」と不義理がいまひとつしつくりこないが、音注「捺非多」は「人な人」でまちがいなからう。0223「忠厚」也非多(えいひと)、0285「読書人」措谷蒙司六非多(がくもんするひと)。

0153 「没良心」徒学戈捺(どうよくな) A…ドヨクナ、胸欲な B…ドヨクナ
『南山俗語考』卷一に「没良心ドヨクナ」とある。とくに短呼と解すべきかどうか。なお、0221「刻薄」拖約古納

(どうよくな)も参照。

- 0154 「胸」木你(むね) A…ムニ B…ムネ
0155 「乳」之之(ちち) A…チチ B…チチ
0156 「肚」花拉(はら) A…ハラ B…ハラ
0157 「肝」哈拉空搭(はらわた) A…ハラワタ B…ハラワタ
0158 「胆大」代丹(だいたん) A…ダイタン B…ダイタン
漢蒙勿多一(きもんふとい) A…キモンフトイ B…キモンフトイ
0159 「胆小」溪蒙何所一(きもんほそい) A…キモンホソイ B…キモンホソイ
0160 「腰」蘭妥(■) A…ラト、腰子は腎臟、古語は「ムラト」 B…むラト?
こは腎臟の意。「むらと」に対応する語形であることはまちがいあるまい。
0161 「伸腰」奴薄(のぶ) A…ノブ B…ノブ
見出し語は腰をのばす、やすむの意。
0162 「卵」馬蘭(まら) A…マラ B…マラ
『雅俗漢語訳解』に「卵 陰莖を云ふ」とある。
0163 「卵袋」今搭姆(きんたま) A…キンタマ B…キンタマ
0164 「毯」子皮(つび) A…ツビ B…ツビ
見出し字、大漢和辞典には「け」とあるのみだが、こは女陰の意の「つび」であろう。『節用集』『玉門ツビ』。
0165 「尻」婆婆(ほぼ) A…ポボ B…ポボ
見出し字は女陰の意。『長崎方言集覽』『ポボ (一) 女の陰部。(二) 交接。』
0166 「小尻」迷迷受(めめじよ) A…メメジヨ B…メメジヨ
『長崎県方言辞典』『めめじよお 女性の性器。女陰。沓岐。メメジヨ 五島—小値賀。佐世保市早岐。』
0167 「臀」失里(しり) A…シリ B…シリ
『漢語方言詞匯』の範圍に限れば、尻の俗語で「臀」を用いるのは温州方言のみである。
0168 「大腿」木木奴婆拉(「奴↓?」もまたぶら) A…モモノバ(?)ラ B…モモノバラ

音注を素直に読めば「もものばら」だが、そういう語形の確証がない。『長崎方言集』「モモタブラ ふともも」、『長崎方言辞典』「ももたぶら ふともも。太股。大腿部。対馬―敵原町豆酸。五島―小値賀・三井楽。平戸市。松浦市志佐・御厨。北松浦―生月・鹿町。佐世保市皆瀬。長崎市。」などから、「奴」字を改訂して「ももたぶら」と解したい。

0169 「膝」脚聞(■) A…● B…●

校本B覚え書きに

「膝」の音注「脚聞」は「キヤク」か。因みに、「脚」の音注は「挨拶」(アシ)。

とあるが、薬韻見母の脚と洽韻崇母の聞でキヤクはかなり苦しいうえ、見出し語との不調和がある。音注「脚」字は他に例がなく、「聞」はOSOS「蒂」聞(■)があるのみ。ちなみに、音注「脚聞」は足踏みブレイキの意になるが、ここは関係はあるまい。『南山俗語考』巻一「膝頭ヒサ」

0170 「小腿」姿多習你(つとずね) A…● B…●スネ

『南山俗語考』巻一に「小腿ツト」、『老岐島方言集』に「ツトずね 脰脛」などがある。福岡・熊本・鹿児島あたりでも、ふくらはぎのことを「つと」と言い、萩原義雄氏が指摘されたように、ここは「つとずね」であろう。ただし音注「習」字は他に例がない。

0171 「脚」挨拶(あし) A…アシ B…アシ

音注「膝」は表語を効かせたのであろう。他には例がない。

0172 「伸脚」下式奴薄(あしのぶ) A…アシノブ B…アシノブ

0173 「皮膚」非夫受(■) A…● B…ヒフツヨ?

音注「非夫」で「ひふ」は間違いないが、「ひふじよ」の語形は確証がない。

0174 「毛」結(け) A…ケ B…ケ

0175 「肉」呼之(■) A…ホヂ?、脯(ホジシ) B…ホヂし?

0176 「筋」四池(すじ) A…スヂ B…スヂ

0177 「血」出(ち?) A…チ B…チ

此之(■) A…チ、チ B…チ、チ

音注「出」は他には0064「八月」豁出刮子(はちぐわつ)に見えるだけ。

0178「氣」一居(いき) A…イキ B…イキ

0179「動氣」

花拉客枯深
氣(はらかく、しんき)

A…ハラカク、シンキ B…ハラカク シンキ

見出し語は怒る、立腹するの意。「はらかく」は『壺盧圃雜記』に「腹をたつを 腹をかく」、『長崎県方言辞典』に「はらかく 腹が立つ。立腹する。」などである。「しんき(心気・辛気)」の肥前での確証が得られないが、『日本方言大辞典』によれば鹿児島県肝属郡、宮崎県都城市などにある。

0180「力大」代力氣(だいき)

A…ダイリキ B…ダイリキ

0181「出力」式達酥(せいだす)

A…セダス、精出す B…セダス

0182「費力」升徒那(しんどな)

A…シンドナ B…シンドナ

見出し語は骨の折れる、処理の困難な、の意。『唐話纂要』巻一「費力アイトチカララツイヤス」、『長崎県方言辞典』「しんど お心労。心配。」「しんどか 辛い。苦しい。大儀だ。疲れた。」なお0156「辛苦」申徒手(【手↓手】しんどい)もある。

0183「泪」那苦(なく) A…ナク B…ナク

0184「涕」法那一六(【一↓十?】はなしる) A…【一↓十】ハナシル B…ハナイル

校本B覚え書きに

校本、音注「法那一六」の「一」を「十」に校され、「ハナシル」と読まれたが、本書は原文のままにて「ハナイル(ハナヒル)」と試読。

とある。同書索引部の見出しはそれにそって「はな一ひる「嚏る」^{クイ}」としてあるが、見出し語とクシャミとは意味に開きがある。ここは校本Aにしたがいたい。『南山俗語考』巻一「鼻涕ハナシル」。

0185「哭」那谷(なく) A…ナク B…ナク

0186「笑」挨拉五(わらう) A…ワラウ B…ワラウ

音注「挨」字は蟹振開口影母字で／ワ／には不向きである。他例は0106「冰」挨来里(あられ)、0171「脚」挨膝(あし)、0228「長輩」挨捺搭(あなた)のようにすべて／ア／を写している。

0187 「饑唾」雌白其(つばき) A…ツバキ B…ツバキ
見出し語は唾液、つば。『南山俗語考』巻一に「饑唾 ツバキ」とある。音注「雌」字は他に例がない。

0188 「痰」淡(たん) A…タン B…タン

0189 「大便」大便一過(だいべんいく) A…ダイベンイコ B…ダイベンイコ

0190 「小便」小便一過(しょうべんいく) A…ショウベンイコ B…ショウベンイコ

「一過」という音注が5例あるが、先行研究ではこれらをすべて「イコ(行こう)」と解している。0189「大便」大便一過(だいべんいく)、0190「小便」小便一過(しょうべんいく)、0548「公堂上去」子字非雅一過(つうずへや)、0772「去」一過(い)、0891「別處去」別子一過(べつこ)。

「過」字は他に0089「後日」描過日子(みょうごにち)、0580「過船」平過子(子↓干)びんこいの2例があつてともにオ段音を写しているのだが、同じ果撰合口の「戈」字や通撰合口の「谷」哭などもウ段・オ段がほぼ半々の割で現れるのであり、5例の「一過」はとりあえず「行く」と終止形で解しておきたいと思う。

0827 「関」息戈(せく)、0185「哭」那谷(なく)、0531「栗色」哭力(くり)

0355「猫」蟻戈(ねこ)、0680「鼓」太谷(たいこ)、0935「這里」哭里(これ)

0191 「屁」非夫羅(へふる) A…ヒフル B…ヒフル

音注「非」字は／ヒ／に対応する例がほとんどであるが、0548「公堂上去」子字非雅一過(つうずへやいく)は／へ／と解される。『長崎方言集』「へフル へヒル(屁ひる)」、『長崎県方言辞典』「ふる 屁をひる。「屁をフツた」東彼杵一波佐見。大村市旧市内。西彼杵一野母崎。「へふうむし 屁ひり虫。捕らえると思臭を放つ昆虫。長崎市。「へふうじょおご 屁ひり上戸。よく屁をひる人。長崎市。」のような記述からも、ここは「へふる」と解してよからう。

0192 「汗」阿式(あせ) A…アセ B…アセ 《駒上…式》氏

0193 「汗出」阿式哭雖(あせ) A…アセクサイ B…アセクサイ 《駒上…式》氏

見出し語は汗をかくの意。『南山考講記』一「有汗出アセガデル」「汗不出アセハデヌ」「汗出来アセガデタ」。 「あせくさ」は見出しとの不調和が気になり、音注「雖」字も他に例がない。「阿式?哭(あせかく)」の転倒か。

0194 「形」客搭執(かたち) A…【拉↓搭?】カタチ B…カタチ 《駒上…搭》拉

0195 「影」客及(かげ) A…カゲ B…カゲ

0196 「美貌」也米米（ええめめ） A…エメメ B…エメメ

0121 「面」参照。『長崎県方言辞典』「ええ いい。良い。」。『日本方言大辞典』「よかめめ「良」」「めめ」は「め（見目）の転か）容貌の美しい子。鹿兒島県」

0197 「醜貌」業衣業谷（■） A…● B…ミニクイ？ 《駒上…谷》古

校本B覚え書きに

本書は音注原文を「業業谷衣」の倒錯と考へ、「ミニクイ」と試読する。

とある。

0198 「標緻」木也子（■） A…● B…モエギ？

見出し語は顔かたちの美しいこと。『唐話纂要』卷二「十分標緻イカフウツクシヒ」、『南山俗語考』卷一「標緻ビヤウツクシムマレツキノヨイモノ」、『两国訳通』「標緻ウツクシイ」。

0199 「清秀」氣力寛那客（■） A…キレミナカウ、きれいな顔 B…キレミナカオ
鳥（■）

見出し語は清らかで美しい、すがすがしいの意だが、「キレミナ」では意味不明。なおよく検討したい。

0200 「齊整」寛昔多（【昔↓吾？】みごと） A…ミゴト B…ミゴト

見出し語はよく整って立派である、顔だちが整っている、の意。『南山考講記』卷四「齊整的ツイヂンテ カザリノウツクシイ」

0201 「風流」達梯撤（だてしや） A…ダテシヤ、伊達者 B…ダテシヤ 《駒上…達ナシ》

『唐話纂要』卷一「風流フウリュウダテナ」、『老岐島方言集』「だテシヤ」「だテ」をする人。

0202 「醜陋」米吾司六（【司六↓六司】みぐるし？） A…● B…●

見出し語はみにくい、いやしいの意。

0203 「胖」谷一搭（こえた） A…コイタ、肥えた B…コイタ

『南山俗語考』卷一「胖大的パンタテ コヘフトリタモノ 胖々のパンパン コヘタルモノ」

0204 「壯（壮）」 魁答（こえた） A…● B…●

阿歪（■） A…● B…●

見出し語は盛んな、大きい、丈夫なさまの意。音注「魁」字は他に例がないが、やはり大きい、雄大なさまの意味を持つており、表語を効かせた文字選びと言えよう。左の音注は不明。

0205 「瘦」 也瘦(やせ) A…ヤセ B…ヤセ
亞式答(やせた) A…ヤセタ B…ヤセタ

右の音注の「瘦」字は見出し語そのもの。これも表語をねらったもの。

0206 「老」 老擠(ろうじん) A…ロウジ(ン) B…ロウジン
烏司学里(【烏↓篤】としより) A…トシヨリ B…トシヨリ

『南山俗語考』巻一「年^{ネンラウウテ}老的トシヨリ」。ただし『長崎方言集』「トシオレ 年寄、老人」、『長崎県方言辞典』「としよれ 年寄り。島原市湊・三会。南高来―深江・有馬」といった記述もあり、音注「里」字の解釈は注意を要する。

0207 「後生」 年紀(ねんき) B…ネンキ
滑盖(わかい) A…ネンキワカイ、年期若い? B…ワカイ

0208 「性命」一拿處(いのち) A…イノチ B…イノチ
見出し語は少年、若者の意。『壺蘆圃雜記』に「十三四の男子を ねんき」とある。